

# 風土



花 柘 榴  
神 蔵  
器

枇杷熟るる涅槃の空のかがやきて

大釜に白湯沸騰す朝曇

塩をふく身体髪膚草田男忌

いまよりはまこと茨吉の麦稈帽

一葉の手押井戸あり花柘榴

六月のエンタシスでふ法隆寺  
兄が植ゑ兄が忌日の合歡の花  
父の日や子規の日記の「はて知らず」  
まんまるの月を上げたる蚊喰鳥  
初もののさくらんぼうや舌そよぐ  
とどろきてペン先をどる梅雨の雷  
草取つて己が生命をやしなへり



# 竹間集

同人作品



立 夏

門 伝 史 会

横浜三塔一望にして立夏かな  
風薫る開港広場のカフェテラス  
黒船を知る玉楠の花咲けり  
氷川丸バツクに入れて薔薇の花  
夏立つやジーンズの碧海の蒼  
船よりも白き航跡卯浪晴れ  
卓廻すチャイナタウンや端午節

「淡交」以後（五十六）

野沢しの武

蓑虫の鳴くを待ちみて日暮れしこと  
八月を立ち通したる櫂の木  
父母同胞なかに我が娘や銀河澄む  
父母の忌日妻に確かめぬる夜長  
烏よく鳴く日や残暑まだ去らず  
退席の青年の礼爽やかに  
こと多き九月咲き継ぎ百日紅

南風吹く

鈴木 石花

たかかなや寺に緑の投句箱  
投句箱にチュウリップ詠む五歳の子  
噴水の奏づるリズムサンデイエゴ  
南風吹く碇泊客船大中小  
巨客船五月の海へ錨上ぐ  
子に借りし新車に遠出サングラス  
境内に日本鶏展青田風

桜冷え

山路 紀子

桜餅下校の鐘の鳴つてをり  
含め煮の厚揚げその他春深む  
砂浴びの子雀砂に溺れけり  
聖堂の青きイコンや桜冷え  
駘蕩として天平の女身仏  
百千鳥尾張田楽狭間かな  
春の月ひよつこりひようたん島の浮く

小浜常高寺

岩木 茂

押し寄せる海風寒き放哉忌  
放哉忌三丁町より浪のこゑ  
放哉忌浪のかたちの石を碑に  
林中に誰ぞ火を焚く五月闇  
放哉に筍ひとつ頭出す  
常高院と七人の侍女愛鳥日  
水田植田水田麦秋小浜線

桜蘭

相沢有理子

野遊びの子等ポケットに電子辞書  
あきらかな沖の潮目にカヌー漕ぐ  
望みたる女兒生れし夜の桜蘭  
鱒を干す浜の一つ家赤児泣く  
吹き降りに昏れゆきひと日夏炬焚く  
裏木戸に群るる十葉捨て難し  
空梅雨の母の忌仏間開け放つ

牡丹

小林輝子

余震なほ立夏をきぞに蝶を見ず  
牡丹を詠まむと佇てば遠のけり  
ひとり棲む家を映せる代田かな  
紅白の鯛釣草に海の風の  
幼稚園跡八重桜あふるるよ  
風を曳く浦島草の糸長し  
鼻先にホバリングせる熊ン蜂

川蜻蛉

あ の 家 も こ の 家 も 虚 雪 解 靄  
春 水 の は づ む 水 口 ひ も す 鳥  
河 原 鶉 一 羽 こ ぼ れ て よ り 群 る  
昭 和 の 日 き ぞ に 遠 嶺 々 し ろ が ね に  
さ い た づ ま 折 り 少 年 の 貌 と な る  
燕 の 子 犇 き 合 う て 眼 閉 づ  
夏 蕨 摘 む に 歩 く に 小 腰 折 り  
蛇 の 尾 を 踏 ん で 蛇 よ り 青 く な る  
う た か た に 添 ひ 風 に 添 ふ 川 蜻 蛉  
滝 に 佇 ち 己 の 言 葉 探 し け り

小林輝子

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

海へ向く八十八夜のカフェテラス  
春の逝くベネチアングラスの馬の背に  
大棧橋の一直線に夏に入る  
時とどむ税関遺構夏の蝶  
発祥の碑めぐる馬車道新樹光

川田 好子

アールデコの一等キャビン薔薇香る  
馬車道の桂若葉やワゴンシヨップ  
客船の姿見十面更衣  
母国語のとび交ふ街や関帝祭  
峰雲や舳より艦の万国旗

下山田美江

郡上八幡宗祇の水のあめんぼう  
みどりさす椰の葉一枚手の平に  
風の香や雨城に遺す上総掘り

小林 共代

夏めくや門設へし登城口  
麦の秋十戸の残る母の里

水撒いて畑に虹立つ聖五月  
園丁の腰に鍵鳴る菖蒲園  
生田 作

万緑に座して真白きにぎり飯  
辰雄忌の遠に風立つ夕べかな  
泰山木の花下に見て三の丸

鉦彫りの瑠璃光如来厨子おぼろ  
一本のたまくす花の資料館  
落谷 絹代

武士の残す「横浜日記」館薄暑  
振り返るとき泰山木の花のふえ  
坂がかりの緑蔭展け文学館

◇特別作品◇(抄)

## 寂庵春夏

竹久みなみ

寂庵に来る人々に梨の花  
透き通る春は庵主の声の色  
庵主の春赤い鼻緒の下駄はいて  
夏衣薄紫の匂ひけり  
寂庵の留守をしてゐる青蛙  
円空仏小さな団扇庵主の絵  
弥勒菩薩香の流るる著莪咲けり  
寂聴庵蓮の浮葉の水流る  
風薫る時に音色の生まれけり  
寂庵のおみくじ夏の声を聞く

# 風土独語／神蔵器



けふのほかなき牡丹の色に佇つ

生田恵美子

俳人協会の今年（二十五年）度のカレンダー五月号に

咲ききつてふるへてあたり白牡丹

剛 一

の短冊があり、一読してはっと胸をつかれた。

私はもう二十年近く、玄関先の路地の塀際に、五本ほどの牡丹を咲かせて来た。しかし、霜囲いの藁がだんだんいたみほつれてもう使いものにならなくなつてしまった。新しい防寒の手立ても無いまま、長年、真冬の厳寒も無事に過ごして来たのであるから、霜除けなどしなくても耐寒性はもうあるであろうと思つて何もしなかつた。ところが五本全部枯れてしまった。

今年をあきらめていたところ、やつぱり淋しくなり、急遽、前と同じ五本ばかり買った。地におろす時期はどうに過ぎていたのか、今年鉢植えのまま花を見ることにした。

五本のうちの一本は純白の大輪「白玉獅子」で、ある朝、他の牡丹より少しおかれて花を開いた。いく重にも抱き合い、重なり合つた外回りの花片はさらに大きく開こうとし、内側のいく重に

も重なり合つた花片は、中央に金色にかがやく蕊をしつかりと守りながら、外回りの花片の開こうとする力と、相拮抗することく、花全体がこきさまにふるえていた。

私が今瀬剛一さんの句をカレンダーで見たのは、それから数日後であつた。

ところで、生田さんの掲出句「けふのほかなき牡丹の色」に注目された。

牡丹はすこし大きな木になれば、一本でも沢山の花を咲かせ、牡丹園など十日から半月以上も咲きつづける。しかしただ一つの花はおよそ三日、四日目ぐらいになると、花全体がくずれ一ひらずつばらばらと散りはじめる。咲き出した花は夜にはかるく閉じて眠り、翌朝、朝日が射して、空気がぬくもると、ゆつくりと開く。それも花の盛りが過ぎると、もう夜は花片を閉じない。

有名な虚子の

白牡丹といふといへども紅ほのか

虚子

この句の「紅ほのか」については問題視されたことがあつた。私の乏しい体験だが実際に「紅ほのか」の白牡丹は見たことはない。しかし、冬芽を見ても白牡丹が紅牡丹よりみどり色を濃くしている。やがて蕾になり開花すれば紅は紅、白は白一色に開く。虚子の見た牡丹は、白牡丹であつたから当然、そつくり白一色とばかり思つていた。ところが、白牡丹の花びらの奥に一筋の紅の走っているのを見出したのである。作者である虚子の驚き、感動は計り知れない。

また、松根東洋城に

横ざまに雨白々と牡丹かな

東洋城

の句がある、横ざまに雨は白々と吹きつけている。牡丹はそこに華やかにほこり厳然と立っている。これは嵐の中の緋牡丹であろう。これも作者にとつて「けふのほかなき牡丹の色」で、もしこの句が白牡丹であつたら、句は成立しない。

その他

白牡丹李白が顔に崩れけり

夏目 漱石

きしきしと牡丹荅をゆるめつつ

山口 青邨

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに

森 澄雄

牡丹百二百三百門一つ

阿波野青畝

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

加藤 楸邨

など牡丹の句は雪・月・花について例句も多く、佳句・秀句も少なくない。

結論的に言えば「けふのほかなき牡丹の色」は、花の盛りの牡丹か、花の散る寸前のおやしいまでの美しさか、何れにしても、冬の寒さにも耐え、精一杯踏ん張り頑張り努力して生きぬいて来た牡丹の花の大輪、見事な華麗な色の花である。作者とは一期一会、言葉もなく、感動のうちに相互供養、相互礼拝の熱い泪がこぼれる。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

けふのほかなき牡丹の色に佇つ 津山 生田恵美子

つばくらめ代田の濁りさましゆく

四阿に運ぶ座布団若楓

直角に物置く机上青嵐

菖蒲園朝の板橋渡りけり

山法師木の教会に靴を脱ぐ 東京 奥田茶々

マーラー聴く薄暑の夜の木々の声

咲きかけの朴に笑窪のありにけり

風薫る浜の帽子屋丸鏡

浜風やミッシヨンベルに雀の子

青嵐 赤道通過 証明書 川崎 豎山道助

晩学は初学に似たり朴の花

青嵐マクベスの森動き出す

夏風邪に美しき名の葉買ふ

初夏に踏むカルチェラタンの石畳

保育所の一段高く花みかん 東京 柿沼盟子

白薔薇は白く崩るる街薄暑

月満ちて中天あをき夏はじめ

芯に灯を抱く地球儀麦の秋

存分の若葉の風と光かな 福生 雨宮桂子

山滴る一茶のこゑを聴きしとき

芍薬や雨ひとつぶを抱擁す

宇治橋を渡れば神も更衣

注連張りて常世の国の卯波かな

八十八夜八丁味噌の籠ゆるむ

二本夏うぐひすの木なりけり 上尾 根岸善行

日には日に月には月に新樹光

ベランダと同じ高さや桐の花

直線の日差しを折りて夏の蝶

石段の途中の風の涼しかり